

研究ノート

「起承転結」小考

高 松 正 毅

Brief Thoughts on *ki-shoo-ten-ketsu*

Masaki TAKAMATSU

文章の構成とは、文章の外にあらかじめ定まったものとして存在するのではない。文章に盛り込むべき意味内容が文章の構成を選択、決定づけるのである。また、文章に盛り込むべき「要素」なら、書き始める以前に、その数をかぞえることも、配列する順番を検討することも可能であろう。しかし、内容を抜きにして文章の構成を論ずることは不毛であるどころか、そもそも不可能である。ゆえに「起承転結」は、文章を書く際には使いものにならない。

本稿ではさらに、英語学習が今後日本語・日本人を変え得る可能性についても触れる。

1. はじめに

筆者の目的は、巷間に喧伝される「起承転結」なるものが、こと説得を目的とする文章を作成するにあたっては極めて不適切で、ほとんど使いものにならないことを論証することにある。そして、この主張は決して奇をてらったものではない。すでに拙稿¹で指摘したとおり、波多野完治、澤田昭夫等の各氏も同趣旨のことを主張しているからである。よって、ここで「起承転結」批判の実際を片端から並べ立てることも可能である。ところが、世の中には「文章は『起承転結』で書け」と指示する文章指南書が、相も変わらず後を絶たない。どうして、これ程までに「起承転結」が重用されるのか。

まず、「起承転結」の定義から確認しておきたい。というのは、一般の国語辞書を引けば分かるとおり、この「起承転結」という語は「物事の組み立てや順序、作法一般」といった抽象的な意味合いも持つからである。ここでは「起承転結」を、次の二つの事実を指すと定義しておきたい。

- (1) 4つの段(文章に当てはめると「意味段落」や「章立て」などのまとまり)から成る。
- (2) 4つの段は、順に「起」・「承」・「転」・「結」という役割を担う。

今さら言うまでもないことだが、「起承転結」は、もと文章ではなく、漢詩（絶句）の構成法から出たものである。絶句は四句から成るものであるため、(1)はあえて言うまでもない大前提である。

問題はどこにあるかという、「起」「承」「転」「結」のそれぞれは、全体を構成する際に果たすべき役割であり、その定義が曖昧で盛り込むべき中味が判然としないことである。やっかいなのは、その曖昧さのために、書かれた文章を分析する際には、あたかもオールマイティーなものであるかのごとき強力さを持つことだ。ともすると、何でも「起承転結」で処理されてしまう。中味に関する説明がなく、実は何も言っていないのと等しいのだが、逆にそのために、何にでも適用が可能なのである²。

「起承転結」では、文章は書けない。しかし、ここで私がいくら「起承転結で文章は書けない。」と断じたところで、この世には書けると言う人がいくらも存在し、その人達は「文章は『起承転結』で書け。」と主張するのだから、全くの水掛け論である。

2. 文章の基本構造とは

それでは、文章がいくつのパート（段・部）からなるか考えてみることにしよう。分かりやすさのために、まず一つの「文」を考えてみる。文における最も単純な形式は「何がどうだ」「何がどうした」といった形式である。したがって「主語（部） 述語（部）」、あるいは「主題 評言」の型であるから、二つの部分から成る。

このことは、文章にも言えることで、「(それが)何(である)」か、と「(その何かが)どうした」か、の二つの要素さえあれば文章は成り立つ。その「何」が分かり切ったものである場合、「どうした」の一つだけで文章が成り立つこともあり得よう。これは、たとえば命令文が、主語なしで成立するのと同様である。しかし、これは「何」が存在しないということではない。省略されていると捉えるべきである。

二つの部分からなる文章の実例を見てみよう。

「ある駅から四、五歳の子どもをつれた若い母親と、子どもの祖母にあたるのだろうか、七十前後の老婦人が電車に乗ってきた。老婦人が私の前に立ったので、私は「どうぞ」と席をゆずった。すると彼女は「ちゃん、席があいたよ」と、入口近くにいた子どもを呼びよせた。目の前にできた空席に子どもを坐らせることに、心がいっぱい、私から席をゆずられたことを忘れてらしく、一言の礼も言わなかった。

こんなこともあった。傘を忘れて電車を降りかけた若い女性に、私は「忘れ物ですよ」と傘をさし出した。彼女は「まあ」と言って、私から傘をひったくり、恥ずかしそうに赤い顔をしながら降りていった。

突然の出来事に会おうと、頭が自分中心に働くことしかできず、見知らぬ人から好意を受け

ても礼を言うことを忘れてしまう人が多いようだ。

このように、

／ 事実の報告
＼ 意見・批評・感想

の組を作って述べるのである。³」

樺島忠夫氏が挙げた例である。樺島氏は分かりやすさや説得性のために、この「事実 意見」の型が有効だと説明する。しかし、この文章における説得性は「論理」ではない。なぜなら、たった二つの事例から、このようなことを帰納し一般化することなど出来ないからである。にもかかわらずこの文章が相応の説得性を持つのは、ここに挙げられた事例が比較的起こりやすいと感じられ、多くの人々が体験しがちな事象であるからだ。もしこの具体例が、「兎が切り株に激突して死ぬ」といった滅多に起こらないような事態であれば、「株を守りて兎を待つ」べきとの主張には誰も賛同しない。すなわちこの文章は社会通念や一般常識、共通認識に寄りかかろうとしたものであると言える。

さて、論理とは次のような「根拠 結論」の型を取るもののことを言う。

1 タバコにはニコチンとタールが含まれている。

ゆえに

2 タバコは人体に有害である。

1が根拠（具体的事実・データ）であり、2が結論である。先の「事実 意見」の型が通念に寄りかかっていたのに対し、「根拠 結論」の型は「根拠づけ」(warrant, rationale or backing etc.)により支えられる。ここでの「根拠づけ」は、仮に補えば「ニコチンとタールは発ガン性物質である。」となる。しかし、ニコチンとタールが毒物であることは周知の事実であり、わざわざここまで明確にするまでもないことであるため省略することが可能だ。この「根拠づけ」が、「根拠」と「結論」の間の関連性の強さ・緊密さを保証するのである。

これがもし、

1 この薬にはジンクピリチオンが配合されている。⁴

ゆえに

2 この薬はよく効く。

であった場合、詳しい「根拠づけ」なしには、もはや論理として成り立ちにくい。ニコチンやタールと違い、「ジンクピリチオン」なるものが何ものであるかが、ふつう我々には分からないからである。

文章の構成について、野内良三氏は次のように述べている。

「前提（論拠）の組み合わせはいろいろあるが、基本である、前提（論拠） 結論（主張）の二部構成は動かない。古来、議論（文章）の構成法（配置）については三段だ、四段だ、五段だといろいろ取り沙汰されてきたが、それは要するにサービス精神（気配り）の多寡に帰着す

る。このことは大論文でも二行の文章でもまったく事情は同じだ。大論文は前提（論拠）が大掛かり（精緻）になるだけである。だから私たちは「すべての文章は二部構成である」と主張するわけなのである。⁵」

しかし、この考えには全く承伏しかねる。以上述べたように「文章は二つの部分さえあれば成り立ち得る」とは確かに言えるが、「すべての文章は二部構成である」などとは言えない。「それは要するにサービス精神（気配り）の多寡」などといった瑣末な問題ではなく、分かり切ったことなら省略してもかまわないが、必要なら絶対に書かねばならないということだ。書かないままにすると、伝達性や説得性が著しく損なわれる。すなわち、分かりにくく、伝わりにくい文章になってしまう。

私は「文章に定まった構成など存在しない」と考えている。構成は、文章の外にあらかじめ存在するものではなく、内容がその文章の形式を決定する。文章の作成とは、何らかの定まった形式に意味内容を押し込めて行く作業ではない。

もし基本形に近いものを求めるとするならば、私は三部構成が正解だと考えている。論理学の三段論法は伊達に三段にしているわけではない。三段が必要なのであり、三段が最も安定する数なのである。ただし、大前提などは省略しても理解が可能のため、実現形としては二段になることが多いだけのことである。

「事実 意見」、「根拠 結論」の二部構成が最も基本的な形式だと述べた。しかし後者が論理として成り立つためには、潜在化するか顕在化させるかは別として「根拠づけ（理由づけ、裏づけ）」が必須である。すなわち、自分の出した結論（主張）は「根拠」にもとづいて「論証」されていなければならない。それだけでは不十分に、対立する意見に対して「反論」を加える必要がある場合もある。

すなわち、盛り込むべき「要素」（あるいは「成分」）なら数え上げることはできても、何部構成にしたら最も適当かは内容によって決まるのである。また、その「要素」の数分の構成に分割しなければならないということでもない。ある文章が結果として「起承転結」の形に収まっているように見えることはあるにしても、「起承転結」で文章を構成し書き上げて行くことはできない。

史上最古のレトリックの教科書を書いたとされるコラクス（500B.C.頃）によれば、説得における要素は「序言 陳述 挙証 結語」（または、「序言 叙述 論述 補説 結語」となる。その後、ヨーロッパ・レトリックでは「序言 陳述 論証 反論 結語」が長く用いられたという⁶。ラテン語で書かれた最古の修辞学書の一つ『ヘレンニウスに宛てた修辞学』（85B.C.）であれば「序論 事実の叙述 主題の分割 自分の意見の立証 対立する立場に対する反論 結論」となる。しかし、「われわれの日常の、様々な議論の場では、この方法はもちろんもっと自由な現れ方をする。」と香西秀信氏も述べるとおり⁷、このことは文章が四部や五部、また六部で構成されることを意味するものではない。すなわち、いつでも全ての要素が必要だというわけではないし、配列順も固定的なものではない。⁸

先の「事実 意見」「根拠 結論」の二部構成も、この順が自然であり、特にそれだけで文章が完結する場合にはこの順となるのが普通だ。しかし逆順もある。すなわち、意見を述べ、「たとえば」などで「事実（出来事・具体的状況・データ等）」を引くことも可能だし、主張を述べ、「なぜなら」などで「根拠・論拠」を挙げることも出来る。だからこそ、特に論理的な言語表現では「接続詞」が極めて重要となるのである。

結論として言えることは、文章においては、その「構成の数」にも、またその「配列の順」にも、あらかじめ定まったものなど存在しないということである。⁹

3．日本人は四部構成が好き

日本には、古来より「序破急」などの三段構成があった。論文でも「序論 本論 結論」の三段で十分なはずである。にもかかわらず、日本人には、どうしても四段にしたいくなる性癖があるものらしい。

文芸の一形態である演劇を例に取って考えてみよう。西洋の演劇は一般に「Exposition-Complication-Resolution」または、「Setup-Confrontation-Resolution」といった三段の構成を取る。すなわち「幸せな男女がいる。 波乱（crisis）が起こる。 危機を乗り越える。」といった形式である。単純化すると「安定 波乱 安定」の山型プロットだ。

これが日本だと、「幸せな男女がいる。 誰もが羨むほどである。 問題が持ち上がる。 危機を乗り越える。」となる。「安定 安定 悶着 安定」の形である。つまり「承」が加わる。問題は、本来不必要な「承」を、どうしてもわざわざ加えるのにかにある。この「承」の部分で、「起」の部分での「安定」を重ねあおっておくのである。すなわち、この「承」は、次に来る「転」を盛り立たせ、結果として「結」への落差を増幅する効果をもたらす。

文学的な文章¹⁰は、「結」にまで読者（舞台であれば観客）を惹きつけ、「結」に至ってある種の感動・解放・カタルシス・余韻などを感じさせることを主眼とする。特に、「演劇」の舞台のよう（様式が固定的）なものや、「物語」を語る場合、中でも「心の葛藤」を描く際には、振幅を高めることが出来る四部構成は極めて効果的である。

日本人は、なぜか三部よりも四部の方を好むようである。すなわち日本人は、人情物や浪花節、演歌の世界が大好きなのである。日本人の「情感」に訴えようとするなら四部構成を選べ、ということになるのだろう。

あるいはこれは、四季の移ろいに豊かな日本の風土がもたらしたものかもしれない。起源はもちろん中国だが、「青春、朱夏、白秋、玄冬」と、日本人は四季を人生にまで投影しようとする。

4. 英語学習が日本語・日本人を変える!?

他人にまで勤めるのは厳に慎んで頂きたいが、自分では「起承転結」を使えると信じ、自らそのように文章を書こうとするのは勝手である。

「起承転結」が真にまずいのは、それが単に役に立たないからではない。問題なのは、「起承転結」がその人の思考様式にまで深く影響を与えてしまう点だ。「文章は起承転結だ」などと思い込むと、「転」の部分でガラリと転じようとして、文章全体のテーマとは一見何の関わりもないような話題を唐突に持ち出してみたり、言いたいことの核心を「結」の部分に置こうとして、後ろへ後ろへと引っ張ってみたりと、文章構成上、絶対にやってはならないことを意識的に巧むようになってしまう。水戸黄門の印籠ではないが、50分中の40分過ぎに出す、ということをや文章でもやってしまうわけだ。これは、私が授業で厳しくいさめるところである¹¹。もし印籠が事の核心であるのなら、もったいぶらずに最初から出すべきである。

たとえ論文であっても、読み手を惹きつけるサスペンスはある程度必要であろう。しかし、盛り上げて「山場」をこしらえたり、最後に「落ち」をつくってみようとしたりするのは、必要がないどころか却って理解の妨げになる。

このことを認識するようになったのは、英語のパラグラフ・ライティングを学ぶようになってからだが、より明確にすることができたのは「対照修辞学 (Contrastive Rhetoric)」のおかげである。

「今から30年以上も前、アメリカの大学で、多くの留学生にライティングを教えていた言語学者のロバート・カプラン (Robert B. Kaplan) は、留学生の書く作文の論旨の展開の仕方が、母語グループによって特徴があることに気づきました。(中略) 日本人・韓国人などのアジア系の学生の書くものは、途中まで読んでもいったい何が言いたいかわからないようなものが多く、文章の最後になってからようやく筆者の言いたいことがおぼろげながらわかったりする。¹²」

「日本人が書く英語の文章の構成には文化的に動機付けられた書き方がよく現れている。彼らのエッセーは構成がめちゃくちゃで非論理的であり、脈絡のない内容が詰まっており、論理性なく論旨が展開されていて、述べられている言説には支持がない。しばしば、説明や支持に代わり、書き手の性格が内容を支配している。(Harder & Harder, 1982、大井訳)¹³」

二番目の例は、あたかも日本人はバカだとも言わんばかりの調子である。しかし事実として、「起承転結」で英文を書くと、欧米人には全く理解されないのである¹⁴。「起承転結」を主張する人は、日本語の中でのみ生きる人である。すなわち「英語(あるいはその他の欧米の言語)」も出来なければ、「論理」も全く知らない人である。

もちろん事の是非は、また別の問題である。「対照修辞学」そのものも、英語を絶対の基準とし、その基準から外れるものは全て不適切とする英語帝国主義の現れとする批判もある。しかしながら

英語は、言明による説得のために、そのように形作られてきた長い歴史を持つ。

「イギリスの植民地政策によって世界的に広まり、多くの人々が使用するようになった英語は、民族・文化的な違いによって誤解が生じないように、できるだけ言語の論理性によって意味を伝達する言語となった。よく英語は論理的な言語だと言われるが、そうではない。そのような事情により、論理的に使わざるを得なくなったのだ。¹⁵」

日本の文化は、欧米のような「言明する文化」ではない。「察しの文化」である。「沈黙は金」「皆まで言うな。」「言わぬが花」「秘すれば花」……などなど、言葉の裏にある余韻・余情・含蓄などに究極の価値を置いてきた。そのためには「起承転結」はまことに相応しい。

しかし、暗に情に訴えかけるのではなく、言明し「論理」で相手を説得しなければならない場面や、「伝達性」が最も優先されるべきビジネスの現場では、「起承転結」は使えたものではない。

最近の日本における英語学習の流れは、たとえば、本間正人（2002）『英語で鍛えるロジカルシンキング！』日経BP社、富岡龍明（2003）『論理思考を鍛える英文ライティング』研究社、三森ゆりか（2003）『外国語を身につけるための日本語のレッスン』白水社、などをはじめとして、NHKのラジオ英語講座「ビジネス英会話」などでも「論理性」¹⁶を極めて重要視する。

これは、日本語の発想をそのまま英語に置き換えたところで、全く通用しないからである。現状を見る限り、英語のグローバル言語化に伴い、今日の日本は英語、英語と草木もなびくありさまである。英語学習により、日本語・日本人は否応なく変わって行かざるをえないであろう。

（たかまつ まさき・本学経済学部助教授）

- 1 高松正毅（2003）『『文章表現技術』の理論確立に向けて』『高崎経済大学論集』第45巻第4号
- 2 「起承転結」を主張する人たちは、頼山陽の作と伝えられる俗謡「糸屋の娘」を良く引用する。しかし、この事実そのものが「起承転結」が意味不明であることの傍証ともなる。ちなみに、この「糸屋の娘」、住んでいたのが、京なのか大坂なのか、江戸なのかすら不明である。すなわち、出典が全く不詳である。このことは「起承転結」の日本における定着（もと「起承転合」であり、『運歩色葉集』（16世紀中葉の辞書）に見えるのが早い例。江戸期に「起承転結」となり定着したものと見られる。）と併せて現在調査中である。
- 3 樺島忠夫（1980）『文章構成法』講談社現代新書 pp.124-5.
- 4 清水義範「インパクトの瞬間」『永遠のジャック&ベティ』（講談社）所収から取った。
- 5 野内良三（2003）『うまい！日本語を書く12の技術』NHK出版 p.121.
野内良三氏の専門は仏文学とレトリックとのことだが、トゥールミン（Stephen Toulmin）の論証モデルやディベートなどは研究対象の守備範囲に入っていないようである。
- 6 波多野完治（1991）『波多野完治全集 現代のレトリック』小学館 pp.94-5 p.127.
- 7 香西秀信（1995）『反論の技術』明治図書出版 pp.63-4.
- 8 新聞記事など「出来事」を述べる際に言われる5W1Hというのも「要素」のことである。かといって、記事が5段落や6段落で書かれるわけではない。また、その配列順については「時 主体 場所 対象/様態」と並ぶのが最も自然だが、強調したい場合などは前に置かれるので、この順番は必ずしも絶対的なものではない。
- 9 長い時を経て形式が固定化されたものに手紙がある。「起首、前文、本文、末文、結語、後付」といった構成で、すでにワープロではテンプレート化もされている。しかし、これは書物における「まえがき、本文、あとがき」のようなもので、肝心のそれら中味の構成には、やはり定まったものは存在しない。

- 10 ここでの「文学的な文章」とは、小説や戯曲など狭く文学作品のことを指すのではなく、余韻や余情、含蓄といったものを含み、山場をつくっては落ちを決めようとする情緒的な文章のことをさす。
- 11 授業ではこれを「同じくでも大違い! Claim(主張)とClimax(最高潮)」として説明している。ClaimはConclusion(結論)と言い換えても良いだろう。
- 12 大井恭子(2002)『英語モードでライティング』講談社パワー・イングリッシュ p.52.
- 13 大井恭子(2002)『英語モードでライティング』講談社パワー・イングリッシュ p.57.
- 14 それが証拠に、朝日新聞のコラム「天声人語」の英訳は、欧米人には全く評価されない。
(Ulla Connor(1996) Contrastive Rhetoric: Cross-cultural aspects of second-language writing. Cambridge University Press pp.41-2.)
- 15 斎藤兆史(2003)『日本人に一番合った英語学習法』祥伝社 pp.137-8.
- 16 NHKラジオ「ビジネス英会話」2003年11月号。たとえばp.38「解決策: 事情を察してもらうのではなく、相手に分かるように説明する。」